

≪研究報告≫

## 幼児期・青年期の多胎児をもつ母親の育児不安内容

### — 2つの事例から見えてきた育児への思い —

高橋琴乃<sup>1)</sup>, 木村絢芽<sup>1)</sup>, 川村泰子<sup>1)</sup>, 佐藤厚子<sup>1)</sup>

**要旨：**本調査は多胎児をもつ母親の育児不安の特徴を、幼児期の多胎児をもつ母親（A氏）と青年期の多胎児を持つ母親（B氏）の2事例を対象に、3歳までの育児不安の共通性、6歳から青年期までの育児不安の特徴と育児支援について考察することを目的とする。研究デザインは事例研究である。調査方法はアンケート調査であり、育児への思いについて、出生から1歳まで、1歳から3歳まで、6歳～12歳まで、12歳～18歳まで、18歳～22歳までの期間に分類し、「嬉しかったこと」「大変だったこと」を聞いた。育児不安の共通項目は出生時から1歳までは、育児への疲労感を感じていたことであった。1歳から3歳までは病院通い、保育園の送り迎えの大変さが共通していた。B氏は学童期から青年期までは児の個性に関連した成長の違い、進学に伴う経済的負担に不安を感じていた。多胎児を持つ母親への支援は出生から乳児期、幼児期だけでなく、青年期までの長い期間で育児を理解し、一例、一例を継続的に支援していく必要がある。

**キーワード：**多胎児, 育児, 母親, 不安, 継続支援

## I. 緒 言

厚生労働省<sup>1)</sup>は、2017年における全ての分娩件数は875,470件であり、そのうち多胎児が産まれた件数は8,937件であると報告している。これは、およそ100人に1人が多胎児を持つ母親であることを示している。

嶋松ら<sup>2)</sup>は多胎児の母親が抱く育児不安の内容は、授乳の難しさ、児の泣きに対する対処の難しさ、児の健康状態への不安、沐浴や入浴の大変さ、自分の健康管理であると報告している。

また、杉本ら<sup>3)</sup>は多胎児と単胎児の母親についてState-Trait Anxiety Inventory (STAI) を用いて分析した。単胎児の母親ではSTAIの状態不安における「高不安」の割合が3割程度であったのに対し多胎児の母親では4割を超えており、多胎児の母親は単胎児の母親に比べ不安を抱きやすい状態であると報告している。

更に横山ら<sup>4)</sup>は具体的な育児不安内容を多胎児と単胎児とで比較しており、多胎児の母親は単胎児の母親に比べ育児に対して問題を抱えていることが多いことを報告している。不安内容は、睡眠時間が短いこと、育児協力者がいないと感じていること、情報が適切に取得できないこと、経済的な負担があることであった。また、子どもが病気した時の通院、健診や予防接種時の人手不足、子どもを連れての外出、母親の外出、時間・気持ちのゆとりのなさ、授乳の仕方の困難さについても問題と感じている母親が多かった。公的サービスとして望むことは育児手当の給付、健診や予防接種時などのヘルパー・ベビーシッターの派遣、多胎児を持つ母親同士の交流会の開催、家事・育児に対するヘルパー・ベビーシッターの派遣であった。

以上のことから多胎児の母親は、様々な育児不安を持っていることが明らかである。しかし、これらの先行研究は乳幼児期の多胎児をもつ母親への調査であ

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：佐藤厚子 〒036-8231 弘前市稔町20-7

Tel : 0172-31-7145, E-mail : satoh-a@hirogaku-u.ac.jp

受理：2021年2月22日

表1 対象者の特性

項目	A氏	B氏
年齢(歳)	39	53
双胎出産時の年齢(歳)	36	29
双胎出産時の分娩歴	初産	初産
児の年齢(歳)	3	24
児の性別	男	男
分娩様式	帝王切開	帝王切開
家族形態	核家族	核家族
育児協力者(3歳まで)	夫, 実母, 義母, ヘルパー, 妹, 弟	夫, 実母, 姉, 妹

表2 出生から1歳までの母親(A氏・B氏)の思い(複数回答)

嬉しかった項目	A氏	B氏	大変だった項目	A氏	B氏
子どもを見て癒やされる	○	—	育児の疲労感(抱っこ, 入浴など)	○	○
夫が育児に協力的	—	—	夜泣きに対応できない	○	—
育児が楽しい	—	—	睡眠時間が確保出来ない	○	—
子どもの体重が増えた嬉しさ	—	—	授乳が難しい	○	—
子どもが成長していく嬉しさ	—	—	子どもの健康状態の不安	—	○
			育児へのイメージがつかない	—	○
			経済面での不安	—	○
			夫が育児に協力的でない	—	—
			愛情に偏りが出ていると感じる	—	—
			あなた(母親)の体調が崩れやすい	—	—
			相談相手がない	—	—
			育児に関する情報が取得できない	—	—
			公的サービスが足りない	—	—
			公共交通機関が利用しにくい	—	—

り, 学童期や青年期の多胎児をもつ母親の育児不安についての報告がない。

本調査は幼児期の多胎児をもつ母親と青年期の多胎児を持つ母親の2事例を対象に, 3歳までの育児不安内容の共通項目を明らかにする。また, 青年期の多胎児を持つ母親の6歳から青年期までの育児不安内容の特徴を明らかにし, 多胎児の母親への育児支援について考察することを目的とする。

## II. 方法

1. 対象者: 幼児期の多胎児をもつ母親1名と青年期の多胎児を持つ母親1名。両者とも研究者の知人であった。
2. 研究デザイン: 事例研究
3. 調査方法: アンケート調査
4. 概念枠組みと用語の定義: 「育児への思い」は, 「嬉しかったこと」「大変だったこと」を聞いた。育児不安の定義は西原ら<sup>5)</sup>を参考にして「子どもの

現状や育児のやり方などについての心配や悩み, 疑問」とし, 「大変だったこと」として聞いた。本調査で多胎児とは「双子」を言う。

5. データの収集期間: 2020年7月28日~2020年8月17日
6. データの収集方法: 調査用紙の配布及び回収は郵送法で行った。
7. アンケート調査項目

- 1) 対象者の特性: 調査時の年齢, 出産時の年齢, 多胎児出産時の出産歴, 調査時の児の年齢, 児の性別, 分娩様式, 家族形態, 3歳までの育児協力者(表1)。
- 2) 育児への思いについて, 文献<sup>2)~4)</sup>を参考に以下について聞いた。

出生から1歳までの嬉しかったこと5項目, 大変だったこと14項目, 合計19項目(表2), 1歳から3歳までの嬉しかったこと5項目, 大変だったこと14項目, 合計19項目(表3)。

表3 1歳から3歳までの母親（A氏・B氏）の思い（複数回答）

嬉しかった項目	A氏	B氏	大変だった項目	A氏	B氏
子どもの出来ることが多くなっていく嬉しさ	○	○	病院通い	○	○
会話でのコミュニケーションがとれる嬉しさ	○	○	保育園の送り迎え	○	○
子ども同士での遊びにより自分（母親）の時間が増えた	—	○	イヤイヤ期によるストレス	○	—
夫が育児に協力的	—	○	子ども同士の喧嘩が増えた	○	—
睡眠時間が確保出来るようになった	—	—	事故への不安	○	—
			家事の疲労	○	—
			体格の違いへの悩み	—	○
			子どもの成長速度の違いへの悩み	—	○
			育児の相談相手がない	—	—
			夫が育児に協力的でない	—	—
			アレルギーへの不安	—	—
			離乳食を食べてくれない	—	—
			育児に関する情報が取得できない	—	—
			公的サービスが足りない	—	—

表4 6歳から22歳までの母親（B氏）の思い（複数回答）

	嬉しかった項目		大変だった項目	
6歳から	子ども同士の支えあいがある	○	人間関係の広がりや違いが生じたと感じる	○
12歳	学校での話を聞き一日の行動を知る安心な気持ち	—	反抗への悩み	○
	子どもが家事を手伝ってくれ、あなた（母親）の負担が減ったと感じる	—	運動能力に違いが生じたと感じる	—
	夫が育児に協力的	—	学習能力に違いが生じたと感じる	—
			健康状態の悩み	—
			体格の違いへの悩み	—
			夫が育児に協力的でない	—
			相談相手がない	—
			公的サービスが足りない	—
12歳から	声変わりなどの変化が起き大人になったと感じる嬉しさ	○	人間関係の広がりや違いが生じたと感じる	○
18歳	子供が無事に進学できたこと	○	運動能力に違いが生じたと感じる	○
	学校での話を聞き一日の行動を知る安心な気持ち	—	学習能力に違いが生じたと感じる	—
	子どもが家事を手伝ってくれ、あなた（母親）の負担が減ったと感じる	—	健康状態の違いへの悩み	—
	夫が育児に協力的	—	体格の違いへの悩み	—
			反抗への悩み	—
			スマホ依存の違いがある	—
			子どもの考えている事が分からなくなる	—
			手がかからなくなる寂しさ	—
			相談相手がない	—
18歳から	子ども自身がそれぞれやりたいことを見つけた嬉しさ	○	日常生活習慣の違いが生じたと感じる	○
22歳まで	子供が無事に進学できたこと	○	子どもが社会へ出る事への不安	○
	喧嘩が減ったと感じる	—	経済面度の不安	○
	育児を終了したという達成感	—		
	子ども二人とも大人になったと感じる嬉しさ	—		

3) 青年期の多胎児を持つ母親に対しての質問項目はピアジェ<sup>6)</sup>やハヴィガースト<sup>7)</sup>の発達段階を参考に以下について聞いた(表4)。

6歳～12歳まで(以下、学童期)の嬉しかったこと4項目、大変だったこと9項目、合計13項目、12歳～18歳まで(以下、思春期)の嬉し

かったこと5項目、大変だったこと10項目、合計15項目、18歳～22歳(以下、青年期)までの嬉しかったこと5項目、大変だったこと3項目、合計8項目。

4) 母親が一番強く育児不安を感じたのはどの時期だったかを聞いた。

5) 育児への思い(嬉しかったこと, 大変だったこと)を自由に記載してもらった。

8. データ分析方法: ①A氏B氏の育児不安の共通性と特徴について, 「出生から1歳まで」と「1歳から3歳まで」に分け, 共通項目を整理した。②6歳から青年期におけるB氏の育児不安の特徴は学童期, 思春期, 青年期に分け, 回答項目を整理した。

### 9. 倫理的配慮

本調査は弘前学院大学看護学部倫理委員会の承認を得て行った(承認番号2020-33)。調査への協力は自由意思によるものとした。また, 調査研究に対して研究目的や方法を依頼文書にて提示した。調査は研究の目的以外には使用しないこと, 本研究の論文が作成された時点でシュレッダーによって廃棄し, 個人が特定されないように配慮すること, アンケートの回収をもって同意を得たとすること, 研究発表時も個人が特定されないよう氏名, イニシャルを使用しないことを明記した。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 対象者の特性(表1)

調査時における母親の年齢は, A氏が39歳でB氏が53歳であった。児の年齢はA氏が3歳, B氏が24歳である。出産時の年齢は, A氏は36歳であり, 高齢出産であった。A氏B氏とも, 多胎児を初産で出産している。児の性別は男児, 分娩様式は帝王切開分娩, 家族形態は核家族であり, 育児協力者が近くにいた。

### 2. 出生から1歳までの母親(A氏・B氏)の思い(表2)

この時期はA氏, B氏共に, 嬉しかった項目がほとんどなく, 大変だった項目が多かった。A氏は子どもを見て癒されることはあったが, 授乳や夜泣きの対応への難しさや睡眠時間がないこと, 抱っこ, 入浴など育児の肉体的疲労を感じていた。B氏も抱っこ, 入浴など育児の肉体的疲労を感じていたが, 子どもの健康状態への不安や育児へのイメージがつかないこと, 経済面での不安など精神的な不安を感じていた。

### 3. 1歳から3歳までの母親(A氏・B氏)の思い(表3)

この時期はA氏, B氏ともに, 子どもが成長し, できることが増えていくことに嬉しさを感じていた。内容はA氏は児と会話でのコミュニケーションがとれるようになった, B氏は子ども同士で遊ぶようになり, 自分の時間が確保できるようになってきたことであった。共通して大変だった項目は病院通いであった。また, A氏は事故への不安のほか, 児の自我の形成による反抗や喧嘩についての不安, B氏は二人の成長の違いに不安を感じていた。

### 4. 6歳から22歳までの母親(B氏)の思い(表4)

6歳から12歳まで(以下, 学童期)のB氏は, 子ども同士の支え合いが出てきたことに嬉しさを感じていた。しかし, 二人の人間関係の広がりの変化に対する悩みや学童期の発達課題である親への反抗への悩みを抱えていた。

12歳から18歳まで(以下, 思春期)のB氏は, 第二次性徴による声変わりなどに成長の喜びを感じていた, また, 二人同時に無事高校に進学したことに嬉しさを感じていた。しかし, 児の運動能力や人間関係の広がりの変化など, 個性や成長の違いによる不安があった。

18歳から22歳まで(以下, 青年期)のB氏は, それぞれやりたいことを見つけ, 無事に大学に進学したことに嬉しさを感じていた。しかし, 個性の違いが更に顕著になり日常生活習慣の違いが生じたことその他, 児が社会へ出ることへの不安, 学費など経済面での不安を感じていた。

### 5. 育児をしていく上で最も大変だと感じた時期

幼児期の母親であるA氏が育児をしていく上で最も大変だと感じた時期は出生から1歳までであった。青年期の母親であるB氏が育児を行なっていく中で一番大変だったと感じたのは, 青年期であった。

### 6. 自由記載から

#### 1) A氏

出生から1歳までで嬉しく感じたことは自分(A氏)の顔を見て児がニコッと笑ったことであった。しかし, 児の眠りが浅く, 抱っこしながら寝かせても, 布団に置くと起きてしまった。1人ようやく寝

たと思ったらもう1人が起きて泣き出し、1日中休む暇がなかった。5kgを超えた児を抱っことおんぶで家の中をウロウロしていた。かわいいと思う余裕がなかった。また、具体的な育児方法の情報が乏しかった。

1歳から2歳までで嬉しく感じたことはファーストシューズを履いて公園を歩いたことであった。「かわいいですね。」など声を掛けてもらえたことが励みになった。大変だと感じたことは保育園からの帰り道、毎日駅まで遠回りをして、電車を見せないと機嫌が悪くなるため、ずっと通い続けたこと。疲れて帰ってご飯支度をしなければならず、しかもなかなか台所に立たせてもらえずきつかったことであった。

2歳から3歳までで嬉しく感じたことは保育園で製作した節分の鬼の被り物がとてもかわいく、A氏が喜ぶと2人とも被ってニコニコしてくれたことであった。大変だったことは児が自分の思い通りにならずイヤイヤ言っているうちに全部イヤになり何がイヤなのか訳が分からなくなることであった。多くの人が多胎児育児の大変さを知って欲しいと思う。

## 2) B氏

出生から1歳までで嬉しく感じたことは毎週土曜日になるとB氏の父親と妹が会いに来てくれたこと(実家からB氏の住んでいる場所まで片道2時間かかるため)であった。大変だと感じたことは夫が仕事で家にいる時間が少なかったため、1人ずつお風呂へ入れること。散歩に出る際、2階から1階へ多胎児用ベビーカーをおろし、おんぶとだっこし、ベビーカーに乗せることであった。

幼児期に嬉しく感じたことは児が4歳近くのときに妹が生まれ、遊んだり面倒を見てくれることが多くなったことであった。また、義母がよく手伝いに来てくれたことも嬉しかった。大変だと感じたことは1人が風邪やインフルエンザにかかると、母親も含め、3人が罹患してしまうことや病院通いが多かったことであった。

学童期で嬉しく感じたことは、長男がいじめを受けていると弟が助けに入ったということを聞いた時であった。大変だと感じたことは小学3年生の頃、長男がいじめを受けて不登校になりかけた時の接し方であった。

思春期で嬉しく感じたことは、2人とも高校に合格したことであった。大変だと感じたことは中学校

卒業式の前日に、東日本大震災があり、震災発生から学校が始まるまでの生活であった。

青年期で嬉しく感じたことは2人とも大学に合格したことであった。大変だと感じたことは大学へ進学するための学費、生活費が二人同時にかかり、自分達の生活費をやりくりすることであった。

## IV. 考 察

### 1. 出生時から1歳までの育児不安

A氏B氏とも、嬉しかった項目はほとんどなく、大変だった項目が多かった。共通した不安は育児の疲労(抱っこ、入浴)1項目であった。特にA氏は授乳や夜泣きの対応の難しさ、睡眠時間の確保、子どもを育てる上での疲労があり、肉体的疲労に結び付いていた。新小田ら<sup>8)</sup>は母親が中途覚醒する要因は授乳やおむつ交換、夜泣きが多く、睡眠問題が生じることにより疲労感も生じていると述べている。足達ら<sup>9)</sup>も睡眠問題は焦燥感や不安感などに繋がると述べており、児を持つ母親はより睡眠不足となり、不安も増大すると考える。また、自由記載をみるとA氏に育児協力してくれる者もいたが、一人で育児する時間が多かったため、休む時間がなく、身体的負担をより大きくする要因になっていると推測される。育児の疲労と睡眠不測の悪循環はストレスの大きな原因であり、この時期は産後うつ病にも関連してくる。子育て不安の高い母親ほど虐待傾向があるとの報告もある<sup>10)</sup>。本調査では虐待のリスクをはらむような結果は見られていないが、育児を行う上での嬉しさより不安が上回ってしまうと虐待へのリスクも高まるため、特に出生時から1歳までの期間は支援が必要である。横山ら<sup>4)</sup>は多胎児をもつ母親へのアンケート調査で適切な情報が取得できなかったと回答するものが有意に多かったことを報告しているが、本調査でもA氏が自由記載欄で述べているとおり、具体的な情報の不足が育児不安に結びついていることが推測された。

B氏は育児のイメージがつかないことや経済的な負担があることをあげていた。横山ら<sup>4)</sup>は前述の調査において経済的な負担を訴える者が多かったと報告している。育児費用は単純に考えて、単胎児の2倍である。出産時のみでなく、成長期にも公的育児資金支援が望ましい。

## 2. 1歳から3歳までの育児不安

この時期になるとA氏B氏共に児とかかわることで得られる喜びが出てくる。しかし、出生時から1歳までと同様、大変だった項目数が多く、病院通い、保育園の送り迎えの大変さが共通している。病院通いについて国民衛生の動向<sup>11)</sup>によると受療者は0歳から4歳までが多くなり、5歳以降は減少している。これは、多胎児に限った事ではないが、同時に2人の児が罹患することも多かったであろうことから母親の負担が増加することは容易に推察される。特にA氏は家事負担や、自分の時間がもてないと感じており、疲労が大きいことが分かる。これは育児の手助けなどの周りの環境もあるだろうが、A氏が高齢出産であることにも関連しているのではないかと考える。A氏の出産年齢は36歳であるのに対しB氏の出産年齢は29歳である。前原ら<sup>12)</sup>の報告では、高年初産婦は高齢であるために子育てに必要な体力の不足を意識するようになると述べており、A氏も体力不足を感じていたことが推測される。

近年は初産の高齢化が進んでいる<sup>13)</sup>。高齢出産と多胎児育児不安の研究はないが、児の活動範囲が増え、事故の危険性が高くなると身体的負担は大きくなる。国民衛生の動向<sup>11)</sup>によると1歳から4歳までの死因の第2位は不慮の事故である。児が同じ遊びや動作をするのではなく、めいめいが様々な遊びや活動をする。まるで逆方向に走りだすこともある。A氏は見えない隙に何らかの事故が発生してしまうのではないかと考えたことも予想される。二人の児を同時に遊ばせることによる肉体的、精神的な疲労は、一人を育てているときの2倍で足りるだろうか。

更に2歳～3歳では児同士の喧嘩が増え、イヤイヤ期が始まっている。Bridges<sup>14)</sup>は生後3か月ごろより怒りが出現し、幼児初期には自我が芽生え、自分なりのやり方でものごとを行いたいという自己主張が強くなり衝突する場面が増えると報告しているが、A氏はこのことについてもストレスを感じ、精神的疲労が生じている。ストレスを軽減するために地域の育児サークルや地域包括支援センターを紹介するなど、地域で育児を支えるしくみが今後ますます必要になると考えられる。

一方B氏は子どもの体格や成長の違いへの悩みがあった。Ookiら<sup>15)</sup>は正常に発育した幼児期の多胎児2029組の身体発育の特徴を解析している。その結果、

在胎週数、出産歴、出生順位はさまざまな程度で身体成長に影響を及ぼすが、全体的な影響自体は小さく、1歳までにほとんど消えるため、少なくとも最初の1～3歳については、成長チャートが必要であるが、6歳を超えては必要がないことを報告した。本調査でもB氏の不安は6歳以降に及んでいない。

## 3. 6歳以降の育児不安

B氏が学童期・思春期に感じている育児不安は人間関係の広がりやの違い、運動能力の違い、反抗への悩みであった。B氏の自由記載内容を見ると、長男が「いじめ」を受けたとある。しかし、弟が助けに入るなど、兄弟の絆を感じられる。福島ら<sup>16)</sup>は中学・高校双生児の体格、体力、運動能力における発育・発達の特徴について9年間の追跡調査結果を報告しているが、最終調査では全国平均との差はみられなかった。本調査でも青年期になると不安項目には挙がっていない。また、反抗期は学童期・思春期の特徴であり、親であれば多くの者が経験する悩みである。しかし、母親が二人を比較することは想像できることであり、訴えを傾聴し、支援する専門家の存在が必要であろう。

青年期に感じている育児不安は成長に伴う日常生活の違いが生じたことであり、社会に出ること、経済面での不安であった。B氏が育児を行なっていく中で一番大変だったと感じるのは、青年期であった。二人同時に大学へ進学するために自分たちの生活を切り詰めなくてはならないと記載があった。B氏は二人同時に進学した喜び、大学に入学した喜びを感じており、親としての務めを果たした安堵感も感じられる。進学や大学入学の際の学費支援は奨学金や国のローンなど様々な存在するが、乳幼児期と同様に多胎児独自の支援が必要かも知れない。

## 4. 今後必要と考える援助

出生から1歳までのA氏とB氏は育児への疲労感を感じている。育児協力者として夫がいるが、両者とも夫が育児に協力的であると感じていない。横山ら<sup>4)</sup>は夫の育児協力は重要であり、夫の育児協力について妊娠中から強調していく必要がある、夫は自分も一緒に子育てを行っていくという意識が重要であると述べている。そのため、夫にも育児に積極的に参加してもらうように妊娠中から啓発する必要があるが、夫の職業など家庭環境の影響が大きく限界がある。従っ

て、公的なサービスの充実が求められる。原田<sup>17)</sup>は産後1か月の母親を対象にEdinburgh Postpartum Depression Scale (EPDS) を用いて産後うつ病と母親との背景について分析している。その結果、「多胎」「帝王切開分娩」はEPDSが高得点であったことを明らかにした。A氏は自由記載の中で、「多くの人が多胎児育児の大変さを知って欲しい」と述べており、切実さが伝わってくる。また、A氏は授乳の難しさについて感じていた。皆川ら<sup>18)</sup>は生後6ヵ月時点での母乳継続率は単体児の約1/3であり、母乳継続の難しさを報告している。A氏は母乳を継続していた数少ない母親の一人であり、病院からの定期的な電話訪問やいつでも相談できる子育て世代包括支援センターや子育てサークルの情報提供が必要である。その中で、育児をしていく上で嬉しく感じていることを聞き、母親の頑張りを認め、励ますことも支援の一つであろう。

B氏が感じている育児へのイメージがつかないことに対しては、児を含めた生活を具体的にイメージできるよう育児の経験を話したり、相談しあえる場を病院に作る事が望ましいかも知れない。そうすると、妊娠中の母親も参加できる。また、B氏は経済面の負担を感じている。東京都調布市では調布市多胎児家庭育児用品等購入支援給付金支給事業を行っており、経済的負担を軽減している<sup>19)</sup>。多胎児育児の経済的な現状が広く理解され、同様の事業が全国の自治体でも実施される必要があると考える。

学童期から思春期に生じている個々の人間関係への広がりについての違い、青年期の日常生活習慣への違いなど個性への対応については先行研究がなく、言及することができない。しかし、多胎児の育児不安は青年期までに及ぶことが示唆され、進学に伴う経済的な負担の増加なども含めて今後ますます、継続した支援が必要になると思われる。

本調査は事例検討であるため、一般化できないことは研究の限界である。しかし、多胎児育児の課題は共通点があるが、個別性も多く存在することが分かった。また、育児不安は青年期まで続くことが分かった。多胎児の出生から乳児期、幼児期の支援だけでなく、青年期までの長い期間で育児を理解し、一例一例を継続的に支援していく必要があると考えられた。

## V. 結 論

A氏とB氏の育児不安の共通項目は出生時から1歳までは、育児への疲労感を感じていたことであった。1歳から3歳までは病院通い、保育園の送り迎えの大変さが共通していた。学童期から青年期までは児の個性に関連した成長の違いに不安を感じていた。出生から乳児期、幼児期だけでなく、青年期までの長い期間で多胎児の育児を理解し、一例、一例を継続的に支援していく必要がある。

## 利益相反

本調査における利益相反はない。

## VI. 文 献

- 1) 厚生労働省, 人口動態統計年報 主要統計表(最新データ, 年次推移) 第9表単産一複産(複産の種類・出生一死産の組合わせ) 別分娩件数人口動態統計年報. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html> (2020年7月1日)
- 2) 嶋松陽子, 高山知美, 多胎児を養育する母親の育児困難感とその要因, 保健科学研究誌, 1, 35-42, 2004.
- 3) 杉本昌子, 横山美江, 和田左江子, 他, 多胎児をもつ母親の不安状態と関連要因についての検討 単体児の母親との比較分析から, 日本公衛誌, 55, 213-219, 2008.
- 4) 横山美江, 中原好子, 松原砂登美, 他, 多胎児をもつ母親のニーズに関する調査研究 単胎児の母親との比較分析. 日本公衛誌, 51, 94-102, 2004.
- 5) 西原玲子, 服部律子, 小林葉子, 他, 母親の育児不安と双生児の精神運動発達との関連性の検討 双生児と単胎出生児との比較から, 日本公衛誌, 53, 831-841, 2006.
- 6) 波多野完治 編, ピアジェの発達心理学, 国土社, 東京, 1965.
- 7) R. J. ハヴィガースト (児玉憲典 訳, 飯塚裕子 訳): ハヴィガーストの発達課題と教育 生涯発達と人間性, 川島書店, 東京, 1997.
- 8) 新小田春美, 姜旻廷, 松本一弥, 他, 乳児の覚醒行動からみた妊産褥婦の夜間覚醒と睡眠感・自覚症状に関する継続的研究. 九州大学医療技術短期大学部紀要, 29, 97-108, 2002.
- 9) 足達淑子, 澤律子, 上田真寿美, 他, 産後1か月の褥婦における睡眠と主観の精神健康観との関連. 日本公衛誌, 65, 646-654, 2018.
- 10) 厚生労働統計協会, 乳幼児を持つ母親の子育て不安に影響を与える要因 子育て不安と児童虐待の関連性. 厚生指標, 55, 1-9, 2008.
- 11) 国民衛生の動向・厚生指標. 一般財団法人 厚生労働統計協会, 東京, 2019.
- 12) 前原邦江, 森恵美, 土屋雅子, 他, 高齢初産婦の産後

- 2 か月における育児ストレスを予測する要因. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 37, 27-35, 2015.
- 13) 厚生労働省: 平均初婚年齢と出生順位別出生時の母の平均年齢の年次推移, [https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/kokufuku/k\\_7/pdf/refl.pdf](https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/kokufuku/k_7/pdf/refl.pdf), (2020年12月24日)
  - 14) Bridges, K. M. B., Emotional development in early infancy. *Child Development*, 3, 324-341, 1932.
  - 15) Ooki, S., Yokoyama, Y., Physical growth charts from birth to six years of age in Japanese twins, *Journal of Epidemiology*, 14, 151-160, 2004.
  - 16) 福島昌子, 中学・高校双生児の体格と体力・運動能力における発育・発達の特徴—9年間にわたる延959名の分析結果—, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 50, 325-342, 2011.
  - 17) 原田なをみ, エジンバラ産後うつ病自己評価表によるスクリーニングにおける高得点者のリスク要因の分析, *保健科学研究誌*, 5, 1-12, 2008.
  - 18) 皆川貴子, 双子の授乳状況の実態と課題 (第1報) 生後10ヵ月迄の双子の授乳状況, *母性衛生*, 41, 454-458, 2000.
  - 19) 調布市ホームページ, 調布市多胎児家庭育児用品等購入支援給付金支給事業の開始, <https://www.city.chofu.tokyo.jp/www/contents/1590129718992/index.html>, (2020年9月30日)

**Child-rearing anxiety of mothers with multiple births in early childhood  
and Child-rearing anxiety of mothers with multiple-birth children in early  
childhood and adolescence  
—Considerations for childcare revealed from two case studies—**

Kotono TAKAHASHI<sup>1)</sup>, Ayame KIMURA<sup>1)</sup>, Taiko KAWAMURA<sup>1)</sup>, Atsuko SATOH<sup>1)</sup>

**Abstract:** To clear the characteristics of child-rearing anxiety in mothers with multiple-birth children, up to 3 years of age, focusing on two case studies of a mother with multiple-birth children in their early childhood (Mrs. A) and a mother with multiple-birth children in adolescence (Mrs. B). Study design is a case study and questionnaire survey regarding the feelings about childcare during the period from birth to 1 year old, 1 to 3 years old, 6 to 12 years old, 12 to 18 years old, and 18 to 22 years old. We categorized them and asked them what they were happy about and what difficulties they had. They reported feeling exhaustion from child-rearing from birth to the age of 1. From 1 to 3 years old, they had a hard time because of going to the hospital and the nursery school. From school age to adolescence, Mrs. B was worried about the difference in growth related to the individuality of the child and the financial burden associated with going on to school. For support for mothers with multiple births, it is necessary to understand childcare not only from birth to infancy and early childhood but also to adolescence, and to provide continuous support for each case.

**Key words :** multiple births, childcare, mothers, anxiety, continuous support

---

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University

Contact information: Atsuko Satoh

20-7 MINORI-CHO, HIROSAKI 036-8213, JAPAN

Tel: 0172-31-7100, FAX : 0172-31-7101, E-mail: satoh-a@hirogaku-u.ac.jp